

『フィラメントな夜』

もりまりこ

9975文字

あらすじ

笠井雫という名前がどこかしっくりしなかった5年間にピリオドを打った。
それでも心の中では、なにかがもやっていた。片付け物をしながら、古ぼけた
ハガキを見つける。20年後に小学校で逢いましょうというメッセージ。意味
もなく指折り数えるとその日付はちょうど、1週間後にせまっていた。

なにかを失ったと感じる時、たぶんそのひとのからだのあちこちが、感知器のようになってしまって、その感覚に耐えられない状態に陥るのかもしれない。

薄い皮膚で、するどい鋭利なものに対処しているような。

無感覚であることがわるいもののように言われることも多いけれど、ひどく傷を負いそうな時は、なにも感じないことが一瞬の救いになることもある。

そんなときはね、身体うごかして手先をうごかしてみんさい。掃除が一番つて、一緒に暮らしていた叔母依子さんが教えてくれたことがある。

あっちのものをこっちに移動したり拭いたりしながら、ほんとうになんで人生のある一時期をあんなに誠実さの欠片もない男のためにつて思ってみる。両親だって離婚してるし、のちにばらばらになった弟や妹だって揃いにそろって離婚したらしい。でもどこかで高を括っていたのだ。じぶんはその域内には、足を踏み入れずに年老いてゆくだろうと。

その日わたしは部屋の片づけをいつもよりは念入りに、ねこそぎすてるつもりで取り掛かっていた。

ありとあらゆる書き崩しや、たまってしまった新聞の切り抜きなどちまちましたものを整理し始めていたら、1枚の色褪せたポストカードが出てきた。

まっしろでもなくオフホワイトでもないけれど、すこしとろつとした白地をバックにして、おいしそうな大きなスターキングデリシャスのリンゴが宙に浮かんでる写真のカードだった。

ポストカードの中に浮かんでるリンゴはてにすることのできないリンゴなのに、いつか食べた甘酸っぱさの香るリンゴよりもいまこの写真の中のリンゴのほうがほんものに見えてきて、ふしぎなきもちになる。

いまのことよりきのうの今頃のことのほうがほんとだつて思ったり、生きてきた時のおじいちゃんよりも夢の中でのおじいちゃんに再会した時、玄関口で抱きしめてくれたその時のほうがりあるなおじいちゃんだと思ったりするのと似ているのかもしれない。

笠井つて名前が明日からのあなたの名前になりましたよつて、役所がらみで伝えられた日から、思えばそれはわたしのようでわたしじゃないつて感覚につき纏われていたのかもしれない。

笠井雫さんつて誰？ そんなふたしかな日々に包まれた5年にピリオドを打つてじゃあこれからどうするつてなつたとき、途端に所在なげな思いに駆られていた。依子さんの言葉をうつすら思い出し、もう何も感じないところを決めた側から、またなにかをつらつら思い出しそうで、あやしかつた。

なにげなく裏返したポストカードには<小路小学校の6年2組のみなさん、20年後の学び舎で逢いましょう>って綴られていた。

もう過ぎたよねって思いつつもふたたび訳もなく、指折り数えてみたら、20年後は、ちょうど1週間後だった。

気にしてないよね。ほんとうにうっかり行ったりしないよね。ってじぶんに問いかけてみた。そこにいるわたしは、そんなの冗談でしょっていうのりだったから、ちょっと安堵した。

小学校を卒業してもうそんなになるんだって、踵を返す。

大人になって笠井と共に暮らし始めた頃よりも、日々をへらへらと生きていた記憶を辿るという作業のなかでしか、わたしはほんとうを認識できないのかもしれない。とくにいまは。

過去に興味のあったものは、どことなくじぶんの剥がれそうになっている一部のように思えてくる。特に笠井雫だった時の、そういう一部は。

かさぶたを無理にはがしたくなる時の気持ちにも似て、掌のなかでそのいくつかをくしゃくしゃにしまいいたくなる。

いっそしてしまえばいいのに、できないってなんだろうと思いを巡らしながら、ふるぼけたハガキに目をやった。

掃除し終わると部屋をぐると見渡す。出窓の外。マンションの下の<スバル>や焼き肉屋<アラン亭>。そこから見える風景がいつもとずれている感じがする。

カーテンの側の茶色いテーブルにはヒヤシンスが、トレーの上に並んでる。

いつか植えないかと思っていた新聞屋さんからもらった球根2つ。

夫の笠井と色違いでお揃いで買ったリキュールを入れる小さなグラスをうっかり割ってしまって。その片割れがはぐれてしまったので、祖父から結婚祝いにももらったお猪口で、水栽培することにした。

風呂上がりのシャンプーしたての濡れた髪をタオルドライしながら、笠井は言った。他愛ない日常の出来事だと思っていたのに。俺のグラス割ったのわざとだろう。と責め立てられた時に、もうふたりがとつくに終わっていることを確信した。わたしは徒労の塊を抱えたまま、なにも応えずにいた。

小学校3年の頃。ひんやりと冷たい石の机に並んでいた教室の生き物たちを思い出す。めだかや金魚の水槽の横にはジャガイモから芽が出ているのとか、ちいさな鉢植えの植物の中でもひととき目立ってそこに存在していたのが、ヒヤシンスだった。

砂時計の8の字型の硝子の水栽培用の容器にぽっかりと収まって。
当て字では、風信子という名前がついているところもなんだか、誘われているように。

部屋にあるヒヤシンスとあの頃の小学校のヒヤシンス。つやつやとした緑色の葉の中に、内包されている鱗茎のなかに誰かの風のたよりが潜んでいるみたいで。

1週間は長いようで短かった。離婚してから時間の長さを時折感じるようになっていた。失業手当で暮らしている今は、たまに本を読む。

<どんな人生にも失われた1日がある>

そんな言葉から始まるみじかい話を読んでいる。もうあの頃には後戻りできないような1日のことを<失われた1日>と呼ぶのだと綴られていた。

街を次から次へと歩き回りながら見知った街がまるではじめての街のように感じる物語の中の彼のように、わたしはかつて通っていた小学校までの道のりを訪れることにした。こんな行動に出るとは予想もしなかった。もしかしたらこれは、あの<ヒヤシンスの罟>かもしれない。

橋のはじまりを歩き始めた時、橋の真ん中あたりにぼんやりと人影をみつけた。その輪郭や動きは見覚えのある馴染んだ影だったので、すこし小走りで近づいた。

保坂だった。保坂健。

靴の底をずりずりと引きずったように歩く、その歩き方はよく知っている。

だってあの幼かった日々、いつもなにかというとすぐそばにいたのは保坂だったから。保坂の隣にずっと立ってみた。

「びっ！ えっ？ ウソ？」

って言った後、もういちど「嘘だろう」って繰り返す。

「保坂だよ。保坂君？ だよ」

保坂健は、出席番号もすぐ前だった。音はおなじくほさか>だったから、教室のみんなによく飽きるまでからかわれた。ほんとは兄弟なのか？ おんなじ家に帰んの？ とかあげくの果てにはおまえらけっこんしたらどうなのとかなんとかかんとか。

「保坂君、もしかして今から向かってるのって？」

「小路小学校！」

小学校のところで声が重なった。なにこんな橋の真ん中でハモってるんだろうと思いつつもおかしくてその後、橋の上でふたり笑い転げた。何年ぶりだろう、こんなに思いっきり笑ってるの。

「あのハガキ、20年も持ってたの？」

「だって、保阪もそうだろう。だから来た？」

「だってそっちだってそうじゃん」

「俺はなんでも捨てられない質なの。巷で流行ってる断シャリとかする奴の気持ちがいしれん」

こんな出会いは思いのほかだった。けどやっぱり保阪だったんだと顔を見てびっくりした刹那、ふいに同じ時間を過ごしたひととひととの距離がひたひたと縮まってゆくを感じていた。

薄暗くてまっすぐな橋の上。なぜだかいつまでもどこまでも歩ける気がした。

夜という感覚まで失って、とにかくこのままずっと歩ける感じが、「しゃがみたくなるぐらいうれしくて、ひたすらふたりで歩く。

トラックや車のヘッドライトがあたりを照らしてゆく灯りも、なつかしいストロボみたいに点滅していた。

ふるい小学校。ちいさく見える小路小学校がそこにあった。もう半ば廃坑になっているらしい。校門の前には、道路の蛍光灯が灯っている。光が届いている運動場の地面が淡い黄色に照らされていた。

「こんなんだったけ？」

保阪の言葉に黙ってうなづく。

夜の校舎に点る灯り。その風景はよくみる感じとどこか違っていてどきどきした。夜の家並みに灯りが点っているのは、多少せつなさは伴うけれどどこで見たって見慣れた風景なのに。

かつて通っていた夜の小学校は胸がざわざわした。

保阪はおもむろにデイバックから大きな袋を取り出した。

「何？」

「今日、来てるのって絶対俺だけだってなんか根拠もなく自信があったからさ、用紙してきたんだ。保阪はバカにするだろうけど」

ごそごとと彼が出してきたのは、掃除グッズみたいなものだった。

「ぞうきんとか持参？ 保坂マジ？ 掃除って意味わかんない。で、これ何？」

「これ、これは廊下を磨くやつ」

そういえば、保阪は小学校時代も真剣に掃除にいそしむ少年だった。

何をそんなに必死になってんだって、いつも謎だったのだ。

「20年後に長い廊下をタッタタッタって、やってみたかったの。笑うなら

笑え。だってさ保阪隼が来るなんて、思わんだろう」

誰が来たって保坂君なんでなんでって質問攻めに合うよと思いながら、それはそうとフルネームで名前呼ぶなって思いながらも、もともとわたしは保阪隼だったことを思い出させてくれた保坂健にすこし、救われていた。

ずっと結婚してからじぶんがどこかへいなくなってる感覚が纏わりついてたから、保坂が名前を呼んでくれた時、遠いところからじぶんが戻ってきているような感じがして正直、うれしかった。

保坂とふたりでこっそり小学校に入ってゆく。

「ところでさ、これって不法侵入とかになんないの？」

「ある意味なるかもな」

「やだよ、こんなに年月経ってさ保坂とふたり捕まるの。よりによって地味な罪名だよ、きっと」

「いやだったら帰ってもいいよ保阪は。俺はまっとうする。それに俺たちは招かれた客だよ。あのハガキにさ」

ここまで来て帰る訳にもいかないけれど。

横広い階段に少し灯りが射している。この階段は雨の日の遊び場所だった。

「ね、やったよね。じゃんけんしてさ」

保坂は掃除の準備に取り掛かりはじめながら、

「ちよこれーと、とかだろ。ばいなつふる。ぐりこおってやつ？」

「今から思うと、だから何？ っていう遊びだよね」

壁のスイッチを押すと電気が弱々しくついた。

「保阪、ほさかしずくう、よそ見しないっ！」

保坂健はあの頃の担任の梨田の真似をしながら、手先を動かしてる。

ぼんやりと窓の外から雲の流れに見とれてて、梨田に叱られて立たされて、それでもまだ飽きずに空を駆け抜けるちぎれ雲から目が離せなかったあの日。

たちまち時間は深くたてにスラッシュが入ってゆく。

気づくと保坂健はもくもくと廊下の掃除を始めていた。掃除道具箱入れから持ち出してきたホウキで廊下の隅から掃いた後、「はいこれ」ってぞうきんをわたしに差し出した。

「競争するべ」

「競争って、わたしらいくつになってんのよ」

「負けたら、夜ごはんをおごること。せーの」

嘘みたいに保坂とふたりで廊下を磨いた。保坂の方がすこし速かったけど、

ふたりで取りつかれたいに何往復も、雑巾レースを勤しんだ。7勝6敗ぐらいになった。

ふと保坂は今日までどんな20年を過ごしてきたんだろうと気になった。

虚を突かれたように保坂の声。

「ワックス掛けます」

掛け声と同時にわたしが位置につこうとすると「ここは戦いません。丁寧にただ無心に磨くのです」とふざけた口調でわたしを導く。

これからきれいになるぞっていう匂いとそのワックスからしてくるみたいでただ保坂に従った。その横顔はなんだかすごく生き生きしていた。もしかしたらあの頃よりも。

黙々を音にするとこんな感じだろうか。まるで修行のようにふたりで廊下を磨く。保坂の横顔をふたたび見る。これまでの時間をどこかかみしめているような面持ちで、わたしは保坂とふたりこんな時間を過ごしていることが知らない誰かからの贈り物の時間のような気さえた。

「光ってね？」

保坂がふたり拭いていた廊下を指さしながら確認している。掃除当番のときいきいきしていたよねって口にしようとしたけど、やめた。

「光ってるね、ほんとに！」

「うわあ、この廊下走ったりしてたんだな。小学校ってなんかまっすぐな場所ばっかだよな。直線いのちっ！みたいな感じで、でも意外と短くねえ」

わたしもさっきそう感じていた。昔は小学校の廊下はひたすら長いと感じていたことが錯覚のようで。記憶もあてにならないなって思う。

「梨田なら言うよな。この廊下見たらぜったいじんせいとはとかって言うよな。たとえんのキンパチ並みに好きだったもんな」

「あの頃はそれが結構うっとうしくてさ。でも、好きだったよ梨田」

「この廊下みたいにまっすぐだったのかなって。職員室ではかなり浮いてたって風の噂で聞いたことあったけど、生徒にとってはいいお兄さんって感じだったと思う」

「いいひとは、早く死んじゃうんだよ」

「お葬式行ったの？ 保坂は」

「行かなかった。っていうか行けなかったって感じ」

「うん、俺もおなじかな」

すごい風の時間がふたりに流れた時、階段を照らしていた電球が少しだけ、チカチカした。ちょっとだけどこからか辿りついた梨田の声みたいだなって思ったけど、笑われそうで保坂には黙っていた。

長いしじまの後、さっき廊下磨いていた時って保坂が言葉をつなく。
「今日の日のハガキの差出人って。書いてなかったらう」
「うん、そうそう。おかしいなって思ってたの。いたづらだった？」
「ある意味、いだつらかも。なんとなくさ、俺たちふたりだけにしか送らなかつたとしたら、面白いなって」
「おもしろい？ それこわくない？ で、誰が？」
「だからさ、今の話の流れで言うと、6年2組の梨田先生じゃねえの」
「廊下磨きながらそんなこと思ってたの？ こんな薄暗がり。保坂の頭の中、なんかよくわかんないけど、フィラメントだね」
「なに？ ふいらめんと？ それって深い意味？ 流行ってる？ 何々？」
狼狽える保坂が、ちょっとかわいかった。
「あ、あれ？ さっきのチカチカってやつ？」
「何でもない。なんでもない。それよりさ、警察に誰か通報したかな？ でもまだ上がってないよね、見とく？」

校舎を後にする前、ふたりは6年2組の札のかかった階段を上がった。
がらがらと引き戸を開ける。そのスイッチはすでに死んでいた。
大きな窓ガラスには、街の明かりが遠くに見えていた。かつての放課後を手繰りよせる。だんだん暗くなってきた空がそこに映しだされる。一緒にいたクラスの人たちと雨降るのかなって言いながらぼんやり外を見てる。しばらくするとぴかっと光って、少し近い場所で雷が鳴った。鳴ったと思ったら植栽のどれかにぶつかっているのか、ばさばさといきなり雨が降ってきた。

教室の中は、空のしずんだ色が床や机ににじんでゆく。

女子たちもいやだあ〜って言いながらもちょっと面白がってるような声。あんまり降りがひどいので、教室の中で雨宿りしながらどうでもいい話を誰かの机におしり乗っけて、スカートの足ぶらぶらさせてみんなでわーわー喋る。

帰り道辺りでどうせ忘れてしまうようなことばかりなんだけれど。今だけはみんな同じ場所で雨宿りっていうのがやたら楽しかった。

保坂もそこにいた。保坂はお母さんと2人暮らしで、仕事の都合がつかなくてなかなか迎えに来なくて。わたしは分け合って叔母の依子さんと暮らしていたから、保坂のとこの事情と似ていて。1人減り2人減りながらさいごの2人になったことを覚えている。

雨の音が線になってざんざん教室に響いていた。

窓からの街の灯りだけが灯った教室で、むかし小学生だった頃みたいに椅子に座って、何も書かれていない黒板を前にして喋った。

「俺さ、今日久しぶりここの掃除しながら思ったんだけど、保阪になら言える

かなって」

「なに？ 秘密の暴露とか？ 打ち明け話？」

ふふって漏れた笑い声が、思ったより天井や壁に響く。

「小路小学校も廃校になったじゃん。でさ、たとえばニッポンでそういう廃校の小学校をさ掃除するプロジェクトみたいなのをやってみたいかもって。キレイになった後は、なんか有意義なスペースとして使ってもらっていいかな」

わたしは保坂の声を聞きながら耳を疑う。疑いながらも保坂の視線はじぶんとはちがう場所をあつちから見ていたのかもしれない。遠いのに、不安よりも前に一条の光だけを信じているような。そんな眼差し。ちょっとそういうところがまぶしかった。

「保坂、ずっと謎だったの。そもそもどうしてそんなに掃除好きなの？」

保坂健の口元からふっと長いため息が洩れるのを感じた。

「話せば、ま、短いんだけど。たぶん母親のせいかもしれない。お袋と2人だったから仕事行ってる間に、そこら辺りをさ適当に掃除しておくど帰って来た時機嫌がいいんだよ。だからそれが、ずっと癖になったって感じ？」

親の顔色を窺ってるちいさな男の子の様子が目に浮かんで、すこしやるせなくなつて、わたしも長い吐息を闇の中に吐く。

「おとなもこどももごくろうさまだね、ほんと」

「だよ。それが哀しかったかどうかとか忘れたけど。他人にさ哀しかったのねとかって思われるのが嫌でさ、結構それはそれで楽しかったかもって思う。こんな歳になつてもやろうってぐらだからさ。やならやめてるしさ」

「で、さっきの＜掃除プロジェクト＞？ うん、いいんじゃない？」

うそみたいな抱負だけど保坂健ならやれそうな気がしていた。わたしは自分には自信がないけれど、保坂なら大丈夫っていうところに関しては絶対の自信があつた。

「いいんじゃない？ って保坂、ひとつとじゃないよ。やるなら掃除嫌いのオマエと組むから」

「おとなの掃除委員の貴重な一票は保坂健のものだから、わたしは関係ないの」

お互いにへんな奴って言いながら、ふたりの声を潜めた笑い声がかつての教室の中に響いた。

そこだけが光つてる廊下を後にする。何かが整つてゆくと、ちがう世界を見ている気持ちに駆られた。ささいなことで反応してしまう感情の揺れや惑いにピリオドを打つて、今日ここから新しい1日が始まりそうな予感がしていた。